

大正十一年

大正十一年一月一日 朝雑煮を祝い、校式に出ず。

晝は御馳走あり。シトロンで皆健康を祝し、飲み合ひ、楽しく元旦を祝す。波木居君、
気の毒にも風邪で起きられず。

二日、夜七時より宮部先生に招待され、舎生十二名行く。北村、五藤氏も来らる。トラン
プのダウトを面白く遊ぶ。最中にスキー合宿に行きし、今井、多勢両君帰り来り共に遊
ぶ。終に蓄音機の響応あり。皆楽しく喜びて散ず。

三日、朝はしるこの馳走。この日まで主賓室にストーブあり。任意に樂団すべし。

四日、朝、鈴木君実習に行かる。

八日 北村氏より贈られたる生ソバを夜食とす。夜十二時松本君帰舎。

五日 夜、一号室にてコムバ開かれ、ソラ、ミズ、リクの遊をする。

一月九日 時田君より文藝部受継ぐ。今夜自分誰れか返らんと思ひて筆を擱く。

十日 午後八時より松本君の土産の御馳走あり。

例の通り話ははずむ。野糞のことどもきたなしきたなし、皆返りて寝たるは十一時とは。

十一日 先日来危篤をつたへられし大隈候死去せらる。惜しむべし。一代の人傑なるを。

自由民権の主張者にして言論界の霸王と言ひへべき侯の死は惜しみてなほ余りあるもの
なり。時まさに十日午前四時なり。

十四日 松島君帰舎さる。折あしくも昨夜来、君が室雨もりし室内つらら下るの惨状に、
中村副舎長の好意にて特別室に避難す。

十六日 夜、飯島君返る。これにて舎生全部出揃ふ。

二十三日 例年にならって三度帝国製麻とほこをまじふ。ピンポン対抗戦なり。しかし帰
るべきに帰り、勝利の月桂冠は吾が頭上に。山田君の怪腕、敵三名を一なめにして終は
ぬ。等しく舎生の感謝するところ。小野君、時田君あっぱれ。若武者ぶりは目ざましく
ともめざまし、かぎりなんめれ。

二十九日 悲しくもゆける先輩恩師、故石沢達夫先生の追悼会開催の通知なされる。

来る二十九日午後二時より札幌同窓倶楽部（北八西五）に於て故石澤達夫君の追悼会
を開催致候間御来会被下度此般御通知申上候

大正十一年一月二十五日

発起人（イロハ順）

半澤 洵	高松正信	南 鷹次郎
星野勇三	宮都宮仙太郎	東海林力蔵
小田切榮三郎	佐藤昌介	白戸八郎
角田啓司	宮部金吾	森本厚吉

故石澤達夫君追悼会順序

大正十一年一月二十九日午後二時

札幌同窓俱樂部ニ於テ開催

司会者 星野 勇三

一、開会之辞

一、賛美歌（三六三番）

一、祈 禱 白戸 八郎

一、聖書朗読（羅八の卅五 - 卅九、黙七の九 - 十七） 白戸 八郎

一、略 傳 半澤 洵

一、賛美歌（二三四番個人の愛唱）

一、吊 辞

一、北海道帝国大学総長 佐藤 昌介

一、札幌同窓会長 南 鷹次郎

一、北海道産牛馬畜産組合連合会長 服部 教一

一、畜産学会長 小倉鉦太郎

一、青年寄宿舍々長 宮部 金吾

一、吊 辞 北海タイムス

一、巖鷲教会長 佐藤 昌介

一、キリスト教青年会長 平塚 博士

一、メソヂスト教会代表者 佐藤 善七

..... 宇都宮仙太郎

一、友人総代 小田切榮三郎

一、有 志

一、賛美歌（一一〇番）

一、挨 拶 遺族総代

一、閉会之辞

当日ノ委員

式場係 主任今井君 委員山田君、時田君、山縣君、矢田君、松原君、西山君、梅津君

案内係 主任笹部君 委員奥田君、鈴木君、小林君、飯島君、山口（千）君

受付係 主任多勢君 委員中村君、波木居君

履物係 委員山口九郎君、岡田君、小野君、松本君

舎長宮部先生の讀める弔辞

維大正十一年一月廿九日謹ミテ故石澤達夫君ノ靈ニ奠ス、顧ミレバ吾青年寄宿八
創立以来二拾有五年有用ノ材トナツテ世ニ出テ活動セルモノ己二百数十名ノ多キニ達ス

而シテ是等ノ人士ハ勿論苟クモ吾舎ノ内情ヲ知ルモノハ皆其背後ニ熱情ノ土石澤君アルヲ思ハザルモノナシ、君資性篤厚ニシテ剛直其敢然トシテ時流ノ外ニ超然タル其信ズル所ヲ堅ク取りテ動かザル常ニ親炙スルモノヲシテ襟ヲ正サシムルノ概アリキ。

明治三十三年吾舎建築ノ事起ルヤ率先シテ其衝ニ当リ寄附金ノ募集ヲ始トシ幾多ノ困難ナル事業ヲ遂行シテ遺憾ナク君ガ性格ヲ發揮セラレキ尋デ翌三十四年ヨリ三十九年ニ至ル五年間ハ公職ノ余暇副舎長ノ任ニ在リ嘗々トシテ舎務ノ整理ト学生ノ監督ニ盡サレタリキ 余不肖舎長ノ任ヲ瀆ス久シト雖モ舎ニ関係スル多クノ事務ハ挙ゲテ之ヲ君ニ一任シ来レリ、今ニシテ思フ、君ハ其ノ労苦ヲ最モ具ニ味ハレタリシナラント、爾来十有六星霜或ハ陰ニ或ハ陽ニ一日トシテ君ガ熱誠ノ我舎ニ及バザリシトキトテナシ、吾舎早くヨリ毎月一回在札関係者及舎生等一堂ニ会シテ懇談スルヲ例トス、君多忙ノ身ヲモッテ常ニ出席シ其肺腑ヨリ出ズル訓言諄々トシテ舎生ヲ善導感化スル所アリキ、殊ニ屢々慈母ノ愛深キトヲ説キ故国ヲ離レテ遠遊セル舎生ノ至情ニ訴フル所尠カラザリキ、此一時以テ君ガ如何ニ至情至誠ノ人タルカヲ語ルト共ニ其ノ最モ感ズル所ヲ移シテ以テ舎生ニ対セラレタルコトヲ窺フニ足ル。

彼此想ヒ来ラバ君ガ生涯ノ一半ハ殆ンド我舎ノ為メニ捧ゲラレント云フモ敢テ不可ナカルベシ。斯クマデ親シク斯クマデ懐ミアル我石澤君今ヤ逝イテ亡シ。豈悼ミテ哭セザルヲ得ンヤ。去年ノ初君ガ健康ヤ、勝レザルヲ聞キ予等ハ密カニ之ヲ憂ヒキ暫クシテ湘南ニ遊ビ後愈公職ヲ辞シ専心保養ニ盡サルコトヲ聞クニ至リ其ノ 春ノ期遠カラザルヲ疑ハザリキ、何ゾ料ン旧臘突如君ガ訃ヲ傳ヘントハ ア、万事止ミ又痛悼何ゾ堪エン然レ生アル者誰カ死ナカラン假令君ノ形骸ハ死セリト雖モ其靈ハ生キタリ、君ガ生前ノ主義ト精神トハ儼トシテ長ヘニ吾舎ノ中ニ存シ舎生ヲシテ自ラ其帰趨ヲ誤ラザラシムルモノアリ 君亦以テ瞑スベシ。

尚クハ享ケヨ。

大正十一年一月二十九日 青年寄宿舍長

宮部 金吾

二月六日 今日学校の記念日。紅白の餅をいただく。午後五時より月次会をひらく。

御馳走八日くチキン肉チャワン蒸し...数ふべからず。

本日宮部先生、高松博士、徳田先輩、鈴木予科教授、北村、亀井両先輩、食卓を共にせらる。

二月十二日 慣例の卒業生送別サクエイヨナス、祝賀式後ピンポン大会ヲモヨホシ、晝ハシルコノ御馳走アリ、北村先輩参加シテ盛大ヲキハム。成績一等賞時田君、二等賞山口千之助君、三等賞山田君

二月十三日 寄宿舍改築ニツキ、午後六時ヨリ特別室ニテ相談会ヲヒラキ改築ニ関スル諸用意希望等ヲ統一シテ十時頃終ル。

二月十六日 各科試験三月九日ヨリ十七日マデニ行フヨシ掲示セラル且又外国語大会午後五時ヨリ挙行セラル。

三月三日 新二卒業セラルベキ諸兄笹部君、小野君、岡田君、鈴木君、山口君ヨリ記念品トシテホークナイフ（洋食用）各二十挺舎ニ寄附セラル、一同感謝ス。

三月十七日 午後五時半ヨリ送別会開カレルベキヲ、宮部先生御宅ニ御病人アリ、御遅レシタメ六時ヨリ開カル、先生夕食ノ卓ヲ共ニシス、御馳走ハコレ山海ノ珍味、曰ク「鯛」曰ク「カツレツ」曰ク「イカの味噌カラシアイ」「カキノフライ」「カジカノ汁」「名古屋大根漬」

七時半開会、開会ノ辞...今井君、次ニ先生ノ御都合デ直ニ先生ノ訓辞アリ、尚ホツイデニ副舎長選挙ニツイテ議長ト云フ格ニテ諸規則ヲ舎生一同ニハカリテ決定セラル。

次デ舎生ノ送別ノ辞アリ アルハ沈痛ニアルハユーモラストニ、各々熱情ヲコメテ送別ス。次デ卒業生諸君ノ挨拶アリ、来賓ノ祝辞ニテ終ル、次デ副舎長選挙ニウツリシ結果左ノ如シ

当選 奥田義正君 拾票 次点 小林作五郎君 七票 同 中村弘君 三票 以上尚、来学期委員ヲ選挙ス、文藝部松島君、食事部多勢君、運動部山口（九）君、衛生部飯島君、会計松本君 以上

終ッテ中村君及奥田君ノ挨拶アリ。

二十四日 本日予科新旧成績発表ありたり。

在舎生は皆々好成績にて一人の落伍者も無かりしは慶賀の至りなり。

二十五日 本日午前五時四十分列車にて岡田君帰省せらる。これにて愈々踏み止まる奥田、西山、飯島の三君となる。

廿日 本月の決算す。一日七十銭四厘の割、西山君「火ばし」を以て台所にて大鼠一匹をさし殺す、大手柄なり。

四月 日 夜終列車にて山口千サン、波木居君、第一に帰札せり。各々郷里のお土産は、珍味、且つ豊富なりき。

拾壹日 本年林学実科を出られたる山口平之助君、愈々今朝午前九時十五分任地野幌へ出発せらる。豫科の授業初まる。

拾貳日 林学実科の富永君再び吾舎にいらる。

拾四日 本日、工学部予科坂本君、農業実科平本君入舎せらる。夕食後先輩林学実科出身岡田氏の御挨拶あり。午後七時矢田君帰舎せらる。続いて十一時山田君帰舎せらる。

拾五日 故石澤氏の遺書数拾冊吾舎の図書室を飾る事となる。本年卒業せられたる山口千之助氏舎を訪問せらる。夜、先輩笹部氏、多勢君帰舎せらる。山口九君も。

貳拾壹日 農学実科貳年山口九郎君退舎せらる。

貳拾三日 小林君帰舎せらる。運動部委員山口君退舎に付追選挙の結果梅津元昌君当選さる。

貳拾四日 本日本学期間の各部屋に宿すべき者の組合及び抽籤に依りて宿すべき部屋を定む。本学期間組合及居室左の如し。

壱号並木君 欠 貳号小林君 参号山田君、坂本君 四号山縣君、飯島君 五

号時田君、西山君 六号中村君 七号矢田君、欠 八号梅津君、欠 九号今井
君、平本君 拾号多勢君、松島 拾壹号松本君、欠 拾貳号富永君
尚、本月、月次会委員左ノ如し。

多勢君、時田君、梅津君、飯島君

貳拾六日 本日文藝部ノ競賣ヲ行フ

四月タイムス 六拾三錢時田君 四月朝日 八十錢梅津君

四月万朝 六十五錢小林君 三月太陽 三十七錢山縣君

三月中公論 四十一錢梅津君 五月タイムス 四十六錢富永君

五月朝日 一円富永君 五月万朝 一円十五錢矢田君

貳拾八日 午後決算をなす。一日約六十一錢なりき。

廿九日 山口千之助君遊びに来らる。工学専門部山田壬三君夕食後入舎せらる。

卅日 農学実科真船龍雄君入舎せらる。山口千之助君帰らる。

五月一日 西山君退舎せらる。午後七時送別の茶菓を食す。

五月二日 木箱来る。故石沢氏贈百科全書を蔵す。

五月五日 今井君帰舎せらる。ピンポン台完全となって備はる。

五月六日 本月の月次会を兼ねて新入舎諸君の歓迎会をなす。

九日 朝四時二十分、運動部の発議円山へ花見に行く。舎生一同。

十三日 舎中の大掃除をなす。

十四日 テニスコートの修理をなす。夜、食事部、運動部、其の労をねぎらふ。山口千之助君遊びに来らる。

十五日 午前一時半、盗賊忍び入り、山田君、中村君被害す。笹部君腕を振はんとせしも彼既に逃走して後なりき、あゝ惜しい哉。

二十二日 本日より復島君止むを得ざる都合により外泊することとなる。

二十四日 予科独逸貳年相磯君入舎せらる。

二十六日 本日決算をなす。

二十七日 本学期第貳回の月次会をなす。山口千之助君来らる。

二十八日 山口君徴兵検査の為帰郷せらる。舎生一同見送る。

六月三日 運動部主催庭球大会をなす。紅軍の勝に期す。

六月四日 競売をなす。眞船君家事の都合により退舎せらる。

六月二十四日 月次会をなす。

七月十日 月次会をなす。

七月十三日 飯島君、時田君、梅津君それぞれ帰省及旅行に立たる。吾舎修繕のため臨時に家遷なりをなす。

九月二十三日 松島君から承継で此処に日誌を始む。今日は舎の引越である。假舎を全部引き上げて修繕成った新装の香生々しい、しかも古巢である所へ戻るために、舎生總て働く。二三の人は都合悪くて手伝へなかつたが、万事好く運び四時頃までに、荷物を運

び了る。空腹にそばをつめ込みなどして、引越を終わった貌である。まだ乱雑は免れない。

又湿気を早く乾すために、各部屋適宜に火鉢を入れる。長い宿望が達せられて実は喜ばしいが追って祝ふ日を迎えて感謝の念を新にしやう。夜婆やを取換へるか否かを協議したりする。

九月二十四日 彼岸の中日で吉例に依り食事部の活動によって、お萩が夕食に備へられる。午後宮部先生来られて、まだ雑然たる廊下を見まはり、二、三の室をのぞかれなどせらる。夕食後、副舎長室にて、婆やを愈明朝かぎり暇をやり、新しいのも直ぐ来ると云ふ報告あり、婆やの暇乞ひの挨拶がある。これから小林さんが外泊を暫くすることになる。

二十五日 朝食を調理したのち、婆やに二十円の謝礼を渡し、一ヶ年足らずで別れる。爺やも挨拶に来る。昨日忌中のすだれをかゝげた桑園湯のDさんの死を悼み、且つは着物のほころびなどで世話になった舎生が之にも香料を送らんと独十銭、總で貳圓を副舎長を代表として贈ることにする。彼女以て冥すべし！喝！！

代表者の報告に曰く「何を云はふと思つて考へて行つたら洗濯屋の奴が出て来て何にしに來たてな顔否眼をするやないか……参つた云々。」

夕食の時新任婆や家族の照介ある。土屋と云ひ、小ざれいな息子一人の三人家族である。次に、室番号、人名を記さう。

一号、梅津君、松島君 二号、山田彌三郎君、相磯君
三号、小林君 四号、波木居君、飯島君
五、山縣君 六号、中村君
七号、今井君 八号、矢田君、井澤君
九号、時田君、坂本君 十号、松本君、土肥君
十一号多勢君、山田壬三君 十二号富永君

二十六日 予科三年の人は、実弾射撃に行く。多勢君は口チの家を造るので大活動だ。夜時田生が水害救済寄附募集の宣傳に声をからして帰つて来ると、土井君の室から火事が起きさうだったと皆騒である。不完全な火鉢に（灰の少い）火を多く焚いた為に疊一枚を焼く。それだけで助かつて大喜だ。新しい住家を焼いたらそれこそ大変。之から皆一層気を付けるやうになるであろう。

二十九日 七時より決算を行ふ。十時半頃までかゝつて、食費一月前一日五十銭なるを知る。食事部の手腕に感謝すべし。次でコンパをなし、下らぬ議論をして、十一時となる。

三十日 新装の寄宿舎に於ける最初の月次会を開く。先生始め七人の来賓を迎へて食事を共にし、委員の活動に依り、非常な御馳走になる。

植物園から借りて來た盆栽が涼い陰を作る下で、お吸物は水のやうに冷くなってゐる。赤飯と多くの皿で腹は充満する。何となく嬉しさが長いテーブルをたゞよふ様子である。月次会となる。先、奥田君立って挨拶あり（開会の辞は山県君である）時田君次に「更

に大いなる或物のために」なる標語を承介するとて戦争と平和の一節を物語る。人は絶えず、目的に向って生きなければならないと云ふのである。井澤君は、熱誠を説かれる。頗る熱誠のこもった声(?)で。

山口千さんは来賓の先鋒として相変らざる話振を以て笑はせる。笹部君はこんどドアになった各室の疎遠となることを恐れ、大いに注告する。五藤氏次ぎドアでは、牛鍋の香も完全に妨げるであらふことを憂ふ。亀井氏は自己の存在を明にするために立ちましたと始め、玄関の黒い古柱は意味深いものである。先人の憧を忍び、気風を失はぬやうに。鈴木氏は、近頃札幌の鈍重、沈滞を感じることに切である。

之は北国の特性かもしれない。シベリヤと伊太利屋を比べれば云々。次に小田切氏慈善を唱へ、近き水害救済寄附募集の実験を語る。

河村氏は時間が無ささうだからとて断り、青木氏立つ。氏は三十七八年頃の人で二十余年以来の初見参であるさうな。舎が大通にあるとき入られ、北五条に移るとき一所に移って来たとのことから懐旧談をされて面白い。次に先生は舎の寄附問題から、舎の特長をよく發揮し、舎の恩人を想ひ、又、寄附の完成を期する等語られ、山田彌君の閉会の辞で茶果に移り、来賓は亀井氏独残して帰る。

それから皆例の如く大いに騒ぎ遊ぶで、十一時半頃散ずる。今日委員は、坂本君、山県君、山田壬君、山田彌君である。

十月一日 山口千之助君、昨夜、富永君方に泊り、今日夜六時半野幌に帰る。小樽高商と予科との試合あり。中島での野球は四対三で負け、小樽に於けるテニスは、危く、大将の奮闘六組を倒して勝つ。撃剣も勝つ。

二日 夜二、三の室で議論、快談の盛なるあり、近来ドアを過信して遠慮なく話す傾向見ゆ。秋の半に対して、各つゝしむを要せざるや。

三日、去る三十日月次会に於て、鈴木氏貳円、亀井氏一円五十銭、山口千氏一円各御寄附ありたり。今夜、予科英農一年板緑秀太郎君入舎せらる。

四日 夕六時文藝部競賣を行ふ。成績左の如し。

タイムス	四十銭飯島君	万朝	八〇銭梅津様
朝日	一円一〇銭富永君	中公	五〇銭山田壬三君
中公	八五銭矢田君	中公	七六銭時田君
中公	一五銭山県君	中公	二〇銭坂本君
太陽	三三銭中村君		

夕七時より副舎長室に集り、記念会のことにつき相談あり。板六君の紹介あり。進修寄宿より、修繕祝として贈られたるリンゴを食す。

五日 十五夜である。秋の月はさへざへと美しい。食事部では芋と、豆と、南瓜をふかして月見にそなへる。

月曜休みとならぬこと明になったので、昨日計画した石狩行は中止となる。明日の休みをベースに大通でやろうと、数人相談してゐるあり。

井澤君は十月頃までの予定で今日旅行に立たる。

板六君も夕方旅行に出らる。山田壬三君は家へ帰らる。

六日 遊戯会の前日とて、学校は休日である。大通八丁目でベースをする人あり。藻岩に登る人あり。楽しき秋の行楽を程よき晴天に楽しむ。

七日 折角の遊戯会も雨のためにつぶれである。授業はやる筈であるけれど、不徹底の中に、時間をくれることになる。明日も降れば良いと罪な願望をかけたたりする。夜晩く、板六君帰舎す。

八日 降りみ降らずみの雨である。明日もおぼつかぬらし。夜山田壬三君帰舎す。

九日 内田氏リンゴを百六十斤持参せられ、舎生希望者一斤六銭にて賣らる。夜数日行方不明にして多勢君をして、番犬後任を計劃せしめたる

口ぢ、散歩に行きし富永君、山田壬君に連れ帰られ、その喜ぶ状鈍犬なりと雖憫むべし。

十一日、遊戯会有る。曇勝ちなしかも屡雨を含むだ寒い風の如く、グラウンドで大したレコードを見得なかった。スタンドも去年の如くでなく淋しい。

林実が優勝旗を取る。一時、テイネ続きの山に雲が れると雪が積っているのを見る。

夜、多勢君、山田壬君、岩見沢よりブル犬の兒を連れ帰る。三十円なりと。

十三日 朝、井澤君帰舎す。記念祭祝歌、中村君作と定る。ブルの名 Rob と定まる。

十四日 予独二年と野球の試合をして九対四で勝って大喜び。

十五日 英予一年と野球の試合をし四対三で勝つ。チームの鼻息当るべからず。

十六日 夜、有志で歌会を開く。五号に集い、二十四首を互選し、批評する。中々の歌が有る。名批評家も有り振ひさうである。奥田君旭川に行かる。

十七日 テイネ登山の日である。朝七時四十三分で札幌発、草鞋ばき、下駄ばき、靴とりどりに、危く間に合って軽川に至る。天気絶好、尚、例年になく、麓にぶた汁の用意ある故か、皆元気あること。時田君は去年の名譽恢復と云ふ評判である。土屋の子供も一所に登って大元気。笹部君ちの一行とも一緒になる。シトロナー本づつ携へた他、多勢君持参のコーヒーを賞味する。四時頃下山、湯に入りなどして、ゆっくり飯を食ふ。奥田君は先に帰らる。

富永君は風邪気なりとて来らず。一日の歡をおさめて、六時帰札。

十九日 楓林原稿紙を配り、大作を期待す。記念会は先生の都合に依り、三十一日と定まる。三十日に一般寄附者を招待することにす。之からます 多忙である。

廿日 祝歌と曲は梅津君作のと定め、之を謄写版で刷る。明日当りより練習を始めやう。庭球の試合を此日曜に期す故練習をする。

廿二日 午前進修寄宿とのテニス仕合をなす。午後は雨のため帝麻との試合中止す。

廿三日 舎の下の池にダック二羽一番を放す。風致を添へること多し。坂本君、奥田君之が世話の任に当と。

廿四日、第二回短歌会を開く。二十首を得て、前の如くす。コムバを兼ねて話はづむ。

廿五日 予科は発火演習に行く。農場である。遂に明日休業となる。

廿九日 明日の準備のため舎の周囲を掃除するに忙し。食堂の飾は次第に成る・

卅日 学制発布五十年記念で十時より大学に式あり。紅白の餅三個を賜はる。午前は全く飾付及室掃除に忙殺さる。各室は何日になく - 但此一件は内証 - 清疎端然とする。パウリスタより蓄音機を借り来り食堂、図書室を通じて来賓応接室に備へ、音楽を奏して舎を賑はす。又壁には舎生出身地一覧あり、入舎生数表、食事見本表、寄附金額表等を飾る。先来賓として、和田健三氏、御来臨、舎を一巡して、暫時にして来り給へる舎長先生と会談して去らる。尚、田中銀次郎氏、亀井専次氏、高岡博士夫人、新島善直博士諸氏なり。一日実に賑かにして和気堂に充つる趣なり。

夜、楓林原稿をまとめて之を綴る。

卅一日 天長祝日の礼を十時より大学中央講堂に行ふ。宮部先生の勅語奉読あり。万歳三唱を三度して散ず。舎では記念祭のために忙しい。飾付、片付に忙しい。午後三時頃来賓と舎生と、舎の前で記念撮影をする。宮部先生を初め先輩諸兄、鈴木先生、亀井氏、足立氏、五藤氏、植村氏笹部氏、山口千之助氏、小林氏、来賓として小田切氏、伊藤氏、田中銀次郎氏、内田平次郎氏、小原茂氏御来臨下さる。三時半より記念式を挙行す。梅津君の開会の辞に始り、奥田君の感想、中村君の報告、土井君、小林君の感想あり、共に大いに此新成の舎に、新しき生命、新しき活力充ちんことを望まる。次に、亀井氏先輩を代表して立たる。心よりの祝辞を述べらる。次に小田切氏立たれて、此舎の主義を美唱し、将来の勇しき雄飛を希はる。

宮部舎長先生、舎修繕、事業の沿革を語られ、舎の万歳三唱を音どを取らる。次に、奥田君、立ちて宮部先生万歳を三唱する。祝歌終りて時田君閉会の辞を以て速に食事となることを期待して散ず。内田平次郎氏はお子供三人を連れられ、途中にて帰られ会食せられなりしは残念なりき。盛なる食事終り、七時半頃より余興となる。

第一部

- 一、正劇 時勢は移る 呑舟一座
- 二、ハーモニカ、オーケストラ オーケストラ団
- 三、大魔術神影流奥義 土井久作君
- 四、独逸語劇馬泥棒 鈍才一座
- 五、飛入剣舞 小田切氏
- 六、悲劇順番 星明劇団

第二部

- 一、尺八 今井君
- 二、童話(狸の腹太鼓の話) 井澤君
- 三、奇術 坂緑君山県君
- 四、童話劇 鬼と地蔵 大供一座
- 五、心情劇 父帰る

十二時を以て無事終了せり。先生及先輩、来賓、大方半にして帰らる。附近の子供大入

りで中々盛である。

此日中島頭三氏より祝電、高松正信氏、池上三次氏、中島九郎氏より各御祝状ありたり。

尚、先輩御寄附左の如し。

金拾円	宮部先生	金参円	河村精八氏
〃五円	鈴木限三氏	〃五円	足立仁氏
〃六円	笹部義一氏	〃六円	山口千之助氏
〃貳拾円	田中銀次郎氏	〃貳円	五藤威夫氏

砂糖一箱亀井専次氏

又、本年紀念祭委員は左の如し

余興係	主任	委員
食事係	主任矢田君	委員
会計係	主任	委員
装飾係	主任	委員
接待係	主任時田君	委員

十一月一日 午后相磯君退舎せらる。

二日 夜決算を行ふ。食費十七円七十銭となる。炭の消費甚多かつたらしい。

三日 実科専門部の実弾射撃に非ず発火演習あり。婆やの更迭あり。

四日 小林作五郎君退舎の発表あり。日中非常に暖であった。山田壬君は地質実習とかで定山溪に行かる。明日帰ると。

五日 午后ストーブの抽籤をする。新しいのを三個買ふことになる。野球部は平原社のチームと戦ひ、十三対八のスコアで敗れた。非常に寒い。

七日	タイムス	三六・一銭	山田壬三君	朝日	九二銭	時田君
	万朝	九〇銭	土井久作君	太陽	三二銭	多勢君
	中公	四五銭	奥田義正君			

今日競賣を行ひ成績右の如し。沈滞したる意気は文藝部を悩ますこと多し。板緑君今日滝川へ行かる。ロブは Distemper を病むで沈痛である。

八日 板緑君晝帰らる。夜猛烈な風雨となる。

九日 夕、笹田磐君入舎せらる。農学実科一年にして土井君と同室となる。

十一日 昨夕の嵐のあとにテイネつづきの山は眞白になった。

午后大通十丁目で東西兩軍の試合をする。始めての人も交へて興味は薄い。西は十何対四で大敗する。夜七時より運動部の御馳走あり。それに次でに第三回短歌会を三号室に開く。十一人集り十七首を得る。後に即詠（空、寒、風）を一首づつ出す。次の委員は山田彌三郎君と板緑君なり。

十四日 初雪。溶けて悪路を作る。ストーブの煙筒を付け始む。夜は非常に寒く、路は凍る。

廿九日 朝、林実一年、玉川義雄くん入舎せらる。

夜、決算を行ふ。食費二十円を越える。記念祭の影響もあるべし。

十二月一日 今井三子君お父君御死亡の由にて朝、帰省さる。

五日、洗面所に湯を入る。雪猛烈に降り積る。

六日 夕、競賣を行ふ。皆の元気ないのに閉口である。

成績左の如し。

タイムス	五四銭	土井君	朝日	八〇銭五厘	玉川君
万朝	七三銭	富永君	中公	四五銭	山田彌君
太陽	三〇銭	多勢君			

七日 夜、南瓜をふかして、舎生の眠気を醒す。又、富永君の蜜柑の御馳走あり。ツララも大きくなり。雪も硬くなる。

八日 予科学期試験発表さる。夕方、猛烈な吹雪。

十四日 今日から日曜をはさんで六日間予科試験始る。実科専門部にも夫々、試験の行はるゝあり。

十五日 富永君旭川に行かる。当分帰らずと。夜晩く立たる。

十七日 多勢君の御母堂昨日来札され今日舎を訪問さる。鯉と羊羹を舎生に贈らる。多勢君を伴って帰国さるゝ由。

廿日 予科試験了り。本年度最終の月次会を行ふ。

特に、前川十郎氏歓迎の会食をなす。来賓は先生始め、前川氏、亀井氏、鈴木氏、小田切氏、北村氏、五藤氏である。前川氏、鈴木先生は、御用のため会食后帰る。非常に活気ある月次会で先生も愉快に感ぜらるゝと云ふ。奥田君の挨拶あり。山田彌君の（原稿ある）演説あって、人生の春を輝しく伸びよと説かる。飯島君の相対性原理の哲学的考察の話あって大膽なる善悪の相対関係を説かる。山県君の主観・客観の心理学的解説より、その詩的価値と関する点を述べらるるあり。梅津君は飯島君の善悪論に答へて、語る所あり。土井君は時代の勢を語り、吾人の之に添ふて行くべきを論ぜらる。波木居君は独の三大学者、アインシュタイン等三人の効積を語る。笹部君はスキーの話をされて、冬第一の運動として推さる。三人の新人生の挨拶此前にあり。

北村氏は、去る六ヶ月の間北海道各地の火山灰地泥炭地調査に旅行なされし話をさる。尚、農民の生活程度或はビートのこと、作農の不振等に話を移さる。五藤氏立ちて此夏千島に登山せられし時の物語をさる。実に興味深く、緊張して拝聴す。さながら、アルペンの物語を聞くやうである。附加して、人は常に（頭と）労働と、思索と読書、この三拍子揃へて円満に活動すべきであると結ばる。亀井氏は簡単に、年末のモットウとして、「騒がずに急がずに」を贈らる。小田切氏は、現今、学制と人物を論じ、学校を終へて、直に、実社会に活動し得るやう準備する要ありと説かる。

次に先生立たれて、近く、二十七日に、大学で記念さるべきパストールの話をさる。千八百二十二年の出生より、彼の人物、研究、発見等、面白く有益なる御講話であった。次に茶菓に移り、十一時過に散ず。その後、委員の改選あり。

会計部員松島景三君 食事 富永長久君
運動 山田壬三君 衛生 土井久作君
文藝 梅津元昌君

その他、色々の協議あり。一時に散会す。十一時頃の汽車で井沢君帰省さる。

廿一日 朝五時三十五分の汽車で、梅津君、坂本君、多勢君帰省。松島君も此朝帰省さる。

夜六時二十五分で山田彌三郎君帰省さる。

廿二日 晩八時富永君帰舎さる。夜九時板緑君帰省否、東京に出発さる。同日午前十時山田千君合宿に行かる。